

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	2025 年度
氏名	川越 優香	指導教員 (主査)	杉本 希映教授

論文題目	大学生の共感性と集団におけるいじり場面での第三者行動の関連 ——心理的安全性に注目して——
------	--

本文概要

【問題・目的】大学生の対人関係におけるコミュニケーション形態の一つとして「いじり」が挙げられる。いじりは関係維持の手段として肯定的に受け取られる場合もある一方（白井，2006），暗黙の規範によって拒否しにくく，トラブルやいじめへと発展する可能性を含んでいる（小鳥・小平，2022）。また，いじりは当事者だけでなく観衆や傍観者を含む点で，いじめの四層構造と類似しており（森田・清水，1994），第三者の行動が被害の深刻化を防ぐ上で重要である。第三者の行動を規定する要因として共感性が挙げられ，近年では感情の方向性と共感プロセスの視点が重視されている（葉山他，2008）。また，ポジティブ感情とネガティブ感情の双方への共感が向社会的行動と関連することが示されている（桜井他，2011）。さらに，第三者の行動は集団に対する認知にも左右され，心理的安全性は職場においていじめの減少や心理的健康に寄与することが報告されている（Dollard et al., 2017 ; Law et al., 2011）。心理的安全性とは，「関連のある考えや感情について人々が気兼ねなく発言できる雰囲気」を指す（Edmondson, 2012）。大学生においても，心理的安全性によって対人リスクが低減することが示されている（Meredith, 2021）。以上より，本研究では，大学生の集団内のいじり場面における第三者行動が，共感性および心理的安全性によってどのように異なるのかを，男女別に探索的に検討することを目的とした。

【方法】大学生を対象に無記名式質問紙調査として実施した。欠損値，性別「回答しない」，想定集団が大学生集団でない回答を除外し，社会的望ましさ得点の高い回答者を除いた結果，分析対象者は 242 名（男性 64 名，女性 178 名）であった。質問紙は，基本属性，共感性プロセス尺度（葉山他，2008），いじり場面シナリオと想定集団，心理的安全性尺度（Edmondson, 1999 ; 丸山・藤沢 2022），いじめ関連行動尺度（蔵永他，2008），社会的望ましさ尺度（北村・鈴木，1986）から構成された。分析は，男女別に平均値の差を検討した後，はやしたて行動，援助行動，傍観行動を従属変数とする階層的重回帰分析を行った。

【結果・考察】平均値の比較の結果，ネガティブ共有およびネガティブ同情は女性の方が高く，はやしたて行動は男性の方が高かった。重回帰分析の結果，はやしたて行動は男女ともに共感性のみが関連しており，男性ではネガティブ共有が，女性ではネガティブ同情およびポジティブ好感が抑制要因となった。男性の結果は，いじめ場面对象とした先行研究とも部分的に一致していた（王・桜木，2016）。女性についても，他者志向的感情が攻撃行動の抑制に関与するという報告と整合していた（菊池・長谷川，2020 ; 桜井他，2016）。援助行動については，男性ではネガティブ共有，女性ではネガティブ同情が促進要因であり，男女で共感プロセスの異なる段階が関与していた。この結果は，道徳判断における性差を指摘した Gilligan（1982）とも一致している。傍観行動では，男性において心理的安全性と共感性の交互作用が認められ，心理的安全性が高い場合にはポジティブ共有が，低い場合にはネガティブ共有が抑制要因となった。一方，女性ではポジティブ好感のみが抑制要因となり，心理的安全性の効果は認められなかった。以上より，いじり場面における第三者行動には，感情の方向性と共感プロセスの両側面が重要であり，その関連は性別や集団状況によって異なることが示唆された。特に男性では心理的安全性も傍観行動に関与しており，個人要因と集団要因の双方に着目した支援の必要性が示された。